

ステップを分割する：モンゴルにおける国境・領土・ナショナリズム、 1943-1949年

セルゲイ・ラドチェンコ

(ノッティンガム大学寧波校)

第二次世界大戦が容赦なく連合国側の勝利へと突き進んでいた頃、モンゴル人民共和国(MPR)を治めるホルローギーン・チョイバルサンは、どの点から見てもソビエトの衛星国であり十分に認識されていない自国の国境線を、中国側に動かす機会を狙っていた。チョイバルサンが望んだのは歴史的不公平を是正することで、モンゴル系民族を分離し、モンゴル人民共和国の国境の内側で事実上の独立を達成した人々および日本と中国の支配に未だ苦しむ人々とを一緒にすることだった。日本帝国が敗戦手前の危うい状況にあり、中国では弱体化と分割が進む中、チョイバルサンは内蒙古の一部を併合し、モンゴル民族すべてを一つ屋根の下にまとめようと動いた。チョイバルサンの構想では、桁はずれに拡張した領土と莫大な人口を擁する大モンゴルは、東アジアの地政学的空間において地域大国となるはずだった。ソビエト指導者ヨシフ・スターリンにチョイバルサンが受け入れさせようとしたのは、この大モンゴルという構想だった。すぐに分かったことだが、中国北部を緩衝地帯とするため、民族主義的方策を講じることをスターリンは厭わなかった。

スターリンは当初、内蒙古を他国の支配から解放する運動においてチョイバルサンを暗黙に支持していた。同様に、新疆で中国に抵抗して戦っていたウイグル族やカザフ族にも武器や助言を提供していた。しかし1945年2月に行なわれたヤルタでの連合国首脳会談の後、このソビエト独裁者は中国政府との協定を求める方が、ソビエトの戦略地政学的な国益をより効果的に守れることに気付いた。海軍基地である旅順港を含む北東アジアをスターリンが現実的に手に入れ、満州横断鉄道を掌握し、南サハリンと千島列島を返還させ、モンゴル人民共和国の現体制（スターリンの意図としては法律上の独立^{デ・ジュリ}）を保証することを、米国が黙認すれば正当化されると考えたのである。チョイバルサンの領土回復主義は有用な道具であり、スターリンはそれを巧みに利用して中国に圧力をかけた。ただし結局のところ、スターリンの策略はチョイバルサンのものより壮大であり、モンゴル指導者が抱いた大モンゴル計画は、北東アジアの戦後体制に関するスターリンの構想とは共鳴しなかった。

それでもチョイバルサンは望みを捨てなかった。1945年8月の後には、内蒙古併合というチョイバルサンの計画をスターリンが支持しないと思われたにも関わらずである。毛沢東が中国で政権を握れば、すべてのモンゴル民族を再統合する計画を実現させたいとチョイバルサンは願っていた。チョイバルサンの考えでは、スターリンが中国共産党に対して

モンゴル人の住む地域をモンゴル人民共和国に譲渡せよと命じさえすれば、彼自身がスターリンに服従してきたように、毛沢東も自分と同じ行動を取らざるを得ないはずだった。スターリンは命じようとはしなかった。毛沢東がそのような策略に同意しないだろうと考えただけではなく、おそらくは、民族主義的感情の高まりの上に建国される大モンゴルからスターリン自身も得るものが何もなかったからであろう。スターリンとチョイバルサンは平行して走る軌道を進んでいた。チョイバルサンは自分の主張をスターリンに受け入れさせることができなかった。しかし本稿では、チョイバルサンがスターリンの操り人形で自らの見解をもっていなかったと論じるつもりはない。いろいろな忠誠心があるが、チョイバルサンを政治家として規定するのは、汎モンゴル主義に対する彼の忠誠心であった。